

Doctor Faustus試論 : Faustus の 'Despair in God' と〈絶望感〉

朱雀, 成子

<https://doi.org/10.15017/2332757>

出版情報 : 文學研究. 70, pp.31-45, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

Doctor Faustus 試論

—Faustus の ‘Despair in God’ と 〈絶望感〉—

朱 雀 成 子

序

Faustus が damnation を招いた原因は何であろうか。彼の “A sound magician is a demi-god;” (i. 61) という言葉の示すように、魔術の力を獲得して ‘demi-god’ になろうとした彼の〈傲慢さ〉は神への重大な罪である。また魂を売った後24年もの間〈甘い快樂〉 ‘sweet pleasure’ (vi. 25) に耽溺したこともそれ以上に深い罪と言えよう。だがこれらの罪が Faustus の救済の可能性を完全に奪ったわけではない。なぜなら神は24年の間に Good Angel や Old Man を通じて Faustus に悔悟の機会を何度か与え、救済しようとしているからである。しかし彼は何度も悔悟しようとしてできず、ついに〈甘い快樂〉に耽るというパターンを繰り返して行く。筆者は Faustus が悔悟できず、damnation を招くに至った原因が「神は魔術を行使した自分を愛してはいない。救ってはくれない」という Faustus の神への絶望にあると考える。(彼のこの神への絶望を “Despair in God, and trust in Beelzebub.” (v.5) という言葉を借りて、今後 ‘Despair in God’ と呼ぶことにする) この ‘Despair in God’ は後に一章で見ると Faustus が〈甘い快樂〉を求めて魔術を行使する決心をした結果生じたものであり、5場ではせいぜい〈不安〉を生み出す程度であるが、6場では耐えきれないほどの絶望感を喚起する。A. Sachs や H. Gardner は、筆者の言う ‘Despair in God’ とそれに起因するこの絶望感を一緒にして ‘despair’ と呼び、この ‘despair’ が Faustus の悔悟の機会を奪ったとしている。¹ だが Faustus は ‘Despair in God’ を意識してもそれに対して絶望感を持たない場合もある (例えば

1. A. Sachs, “The Religious Despair of Doctor Faustus,” *Journal of English and Germanic Philology*, LXIII (1964), p. 643.

8場から始まる24年余の快楽の間、また18場のHelen登場の際など)。また‘Despair in God’は5場でFaustusに意識されて以来、常に彼に神の救いを信じなくさせ、悔悟の機会を失わせる。一方、絶望感とは18場や19場では‘Despair in God’と共に彼に神の救いを諦めさせているが、6場ではむしろ彼に神の救いを求めさせる働きをしているのである。‘Despair in God’と絶望感とは原因と結果という密接な関係にあるにもかかわらず、以上のようにその働きは異なっているところもあり、区別した方がより適切である。従って‘Despair in God’に起因するいわゆる絶望感を今後〈絶望感〉と書き‘Despair in God’と区別する。

この論文ではFaustusがdamnationを招くに至った過程を‘Despair in God’及び〈絶望感〉を中心に考察してみたい。

I

Faustusの「神は自分を愛していない。救ってはくれまい」という‘Despair in God’は、序で述べたように5場において初めて口にされるが、それ以前のFaustusにこのような考えはなかったのであろうか。われわれはまず5場以前のFaustusの神に対する考えをみよう。

1場のFaustusは“Having commenc’d, be a divine in show.” (i. 3)という言葉からわかるように、神に対して敬虔な信仰を抱いていたとは言えない。Mephostophilisを初めて呼びだした3場でも同様に、彼は天国と地獄の区別をしないとしたり、天の喜びを失って悲嘆しているMephostophilisに天の喜びなど軽蔑するようにと豪語するのである。以上のように1場及び3場におけるFaustusの言葉に、われわれは神に対する不遜といったものさえ感じるのである。だが彼はこのような時でさえ‘Despair in God’という状態を経験してはいない。5場以前のFaustusが少なくとも天の喜びにあずかり心の平安を保持していたことは、彼が6場でMephostophilisを天の喜びを奪ったと呪っている(vi. 1-3)ことから明白である。つまり5場以前の彼が神に対して暴言とも言えるような言葉を吐けるのは、彼がまだ神の御手の内にあって天の喜びを感じており、それが無くなった状態を経験していないからだと言える。彼が神学を捨て魔術をやろうと決心したのも‘Despair in God’が

初めから彼に内在していた 2 からではなく、魔術を駆使して demi-god になり、この世の精神的、物質的、肉体的な〈甘い快樂〉を経験したい (i. 52-62) と熱望したからであろう。神から離れた苦しさをいまだ知らない彼は、魔術のためなら神を捨てることも意に介さないのである。だが神に対する彼のこの不遜な態度も 5 場からは少しずつ影をひそめる。つぎに 5 場において ‘Despair in God’ が彼に意識される過程をみよう。

魂を売る条件を Mephostophilis に伝え Lucifer からの返事を待っている 5 場の初めで、それまでの Faustus の神に対する態度からは想像できないことであるが、彼はともすれば神や天国のことを考えている自分を発見する (v.3)。彼は何とか神のことを考えまいとして “Despair in God, and trust in Beelzebub.” (v.5) と Beelzebub (従って Lucifer や Mephostophilis) に少々疑いを抱き、前進できなくなっている弱気の自分を叱咤するのである。しかし Faustus の自己への激励叱咤にもかかわらず、彼の耳には “Abjure this magic, turn to God again!” (v.8) という声が聞こえてくるのである。ここに至って彼は本気で神の下に帰ろうとする。

Ay, and Faustus will turn to God again. (v. 9)

だが Faustus はこの God という言葉に今までと異なった感じを受けたのか、改めて “To God?” (v.10) と反復する。このとき彼の口をついて “He loves thee not.” (v.10) という言葉が出てくるのである。彼は魔術を捨てて神の下に帰ろうとした時に、神が昔の神でないことに気づく。神はもはや彼を愛していないのである。変わったのは彼の方であるが、彼には神の方が変わったように思える。Faustus の ‘Despair in God’ はこうして彼が自分の決心に迷いを覚え始めた 5 場から意識される。Faustus は〈甘い快樂〉を求めて魔術をやることにしたが、それは〈甘い快樂〉を約束したものの Faustus の予期しなかった ‘Despair in God’ をも彼に植えつけてしまったのである。こうして彼は、今となってはもう愛されていないのだからと、神の下に戻るのをあっさりとして断念し魔術を行なう決心をする。

しかしながら、その彼の決心にもかかわらず数10行後の契約の場面で再度迷いが生じる。彼は自分の腕に “Homo fuge!” (v.77) という文字を

見る。これは善が Faustus に警告を発したとも考えられそうだが、その文字が彼の目に消えたり現われたりすることを考えると、Faustus 自身の心の迷いからこの文字が見えたのだと解した方が適切であろう。彼はここで魔術を捨て悔悟しうる二度目の機会を持つ。だが彼は神の下へ逃げようと思った時、

If unto God, he'll throw me down to hell. (v. 78)

と極論してしまう。これは前述の “To God? He loves thee not.” と類似したパターンである。“*Homo fuge!*” という文字を見て神の下に逃げようと思ったにもかかわらず、‘Despair in God’ という壁に突き当たった Faustus は、前の時と同様さほど動揺もせず前進することを決心し、ついに契約証書を Mephostophils に与える。

以上のように Faustus は5場で二度も「神の下に戻れ」という声を聞いたり、文字を見たりしていながら、‘Despair in God’ を意識して神の下に戻るのをあきらめ、前進しようとする。この二つの場面に共通していることは、これらの場面での Faustus には魔術への好奇心も手伝ってか ‘Despair in God’ はあっても、後に6場で見るような〈絶望感〉はないことである。しかし ‘Despair in God’ はこの5場の Faustus の心にもやはり多少の影響を及ぼし、〈不安〉の影を落しているように思える。というのは彼は魔術を行使できるようになったとたん ‘honour’ や ‘wealth’ (v. 22) よりまず最初に妻を欲するのである。彼はその理由として自分が ‘wanton’ (v. 142) で ‘lascivious’ (v. 142) だから妻なしで生きられないと言うのであるが、であればなぜ魔術をやるまでの何10年間というもの、彼は妻なしで生活してきたのか、また ‘wanton’ で ‘lascivious’ なら妻でなくとも woman でよい筈で、ここで Faustus が妻を執拗なまでに (v.145) Mephostophilis に求める理由が解せない。彼が妻を求めたのは肉体的理由というより精神的理由、即ち心の支えを必要としているからではなかろうか。そして彼が心の支えを求める理由は、地獄を信じないと言いながらも、魂を売ったため地獄に落されるかもしれないこと、そしてその時神は自分を救ってはくれないだろうという ‘Despair in God’ から生じる〈不安〉があるからではなかろうか。だがこの〈不安〉は契約完了後、Faustus が Mephostophilis を相手に3場の時のように “...hell's a fable.” (v.128) とか “Think'st thou that Faustus is

so fond to imagine/That after this life there is any pain?” (v.134-135) と豪語するのと矛盾するように思える。しかしこのときの Faustus の心境は 3 場の時と同様とは言えない。なぜなら 3 場の Faustus は ‘Despair in God’ を知らなかったが 5 場では意識しているからだ。つまり 3 場ではいざとなれば神は救いの手をさし伸べてくれるという甘い考えがある。が 5 場では魂を売ってまで魔術を行なうことにした自分を、神はもう救ってはくれないと思っている。したがって 3 場と一見同じに見える 5 場のこの高言も、そのような〈不安〉を追い払おうとする彼の強がりと解釈できるのである。この ‘Despair in God’ に起因する〈不安〉解消のため、彼は妻という心の支えを何よりも最初に求めたのではなからうか。

II

(1) 6 場前半 ‘Despair in God’ は 5 場では〈不安〉を生む程度であったが、5 場から 6 場の間にそれは〈不安〉以上のもの、即ち〈絶望感〉を生む。われわれは 6 場の Faustus が既に〈絶望感〉に陥っていることを “And long ere this I should have done the deed / Had not sweet pleasure conquer’d deep despair.” (vi. 24-25) という言葉から知るのである。Faustus 自身もこの 6 場前半で、自分がこのような〈絶望感〉に苦しむのは〈天の喜び〉を欠いているからだと気づく。

When I behold the heavens, then I repent
And curse thee, wicked Mephostophilis,

Because thou hast depriv’d me of those joys. (vi. 1-3)

彼はここで始めて〈天の喜び〉が魔術の与えてくれる〈甘い快楽〉より重要であること、またそれ無しで生きる苦しさを痛感する。彼はこの〈絶望感〉から脱け出すために魔術を、つまり彼の本来の目的であった〈甘い快楽〉を捨てても〈天の喜び〉を取り戻そうとする。

I will renounce this magic and repent. (vi. 11)

こうして〈絶望感〉はかえって彼を悔悟へ向けさせるのである。

この Faustus の態度は 5 場の、神は所詮自分を愛していないのだからと神の下に戻るのをあっさりとは断念し、魔術を続けていった態度と対照的

である。ここで Faustus の気持を鼓舞するかのように Good Angel が、また彼の ‘Despair in God’ を思い出させるかのように Bad Angel が登場する。

Good Ang. Faustus, repent; yet God will pity thee.

Bad Ang. Thou art a spirit; God cannot pity thee. (vi. 12-13)

Faustus は Bad Angel の「おまえは悪魔だ」という声を聞いても必死でそれに抵抗し

Be I a devil, yet God may pity me;

Yea, God will pity me if I repent. (vi. 15-16)

と一縷の望みを持って神にすがろうとする。今迄神は自分を愛していないと思っていた Faustus が、ここで初めて（また、唯一の箇所であるが）pity という語を用いたことは注目に価する。彼は今や一時的に ‘Despair in God’ を忘れて、神の pity を信じる気持になっている。だが、これに続く Bad Angel の “Ay, but Faustus never shall repent.” (vi.17) という、Faustus のこれからの運命を予言するかのような無意味な言葉は、たちまち彼の望みを打ち砕く。彼はこの一言を聞くや否や、心はかたくなになり悔悟できなくなってしまう (v. 18)。そして彼の耳には “Faustus, thou art damn’d!” (vi.21) という言葉が聞こえ、 ‘Despair in God’ が再び彼を襲う。5場の Faustus はその言葉を聞いても〈不安〉を感じる程度であったが、ここでは “...fearful echoes thunders in mine ears,” (vi. 20) (イタリックは筆者) と言って恐れるのである。やがて彼の眼前には ‘guns’ や ‘knives’, ‘swords’, ‘poison’, ‘halters’ が見えてくるが、これらはおそらく Faustus の、自分は呪われているという強迫観念の産物であり、しかも中世道徳劇の Despair の中には咽に ‘sword’ を当てていた3ものもあることを思えば、彼の〈絶望感〉を如実に示すものと言えよう。

さて、このような〈絶望感〉の中で、Faustus は今迄行ってきた彼の〈甘い快樂〉を思いだす。そしてその〈甘い快樂〉を一つ一つ列挙するうちに次第に彼は元気を取り戻してくる。だが Faustus がここで挙げる〈甘い快樂〉とはどのようなものであろうか。それは彼が魔術を手がける前に計画していた大規模なものでも、また後に見るような愚行でもなく、盲

3. *Ibid.*, p. 626.

目の Homer に Alexander の恋や Oenon の死を吟誦させたり (vi. 26-27), テーベの城を築いた Amphion に魅惑的な琴をひかせ Mephostophilis と合奏せしめた (vi. 28-30) ことなのである。要するに彼が求めたものは、これらの吟誦や美しい音楽という人の心を慰め癒すものである。以上のことから、Faustus の本来の目的は〈甘い快楽〉であったのに、彼は〈甘い快楽〉をそのもの自身として楽しんでいたのでなく、〈絶望感〉を紛らす手段として味わっていたことがわかる。そして今もまた Faustus は過去に行なった心慰められる〈甘い快楽〉を想起することで、彼に内在する〈絶望感〉に目をつぶろうとしている。

Why should I die, then, or basely despair?

I am resolv'd Faustus shall not repent. (vi. 31-32)

こうして彼はもう悔悟しないと決心するのである。

(2) 6 場後半

(1)の終りで〈甘い快楽〉が〈絶望感〉を克服してくれるからと考えて、気を取り直そうとした Faustus は、すぐに Mephostophilis と天文学上の問題を議論し始める (vi. 33-34)。しかし神への望みは抑え難いのか、わずか数10行後に Faustus はその答えを知らながら Mephostophilis に “...who made the world.” (vi. 69) と聞く。彼は Mephostophilis の “Thou art damn'd; think thou of hell.” (vi. 75) という言葉にも惑わされず

Think, Faustus, upon God, that made the world. (vi. 76)

ときっぱり言い切る。(1)の6場前半で “Thou art damn'd” という言葉を聞き、恐れおののいていた彼に、どうしてこのような勇気が芽生えてきたのであろうか。それは彼の〈絶望感〉が非常に深く、ほとんど極限状態にまで達しており、この苦しい〈絶望感〉から抜け出すということ以外、彼には何も考える余裕が無いからだと言えよう。この時 Bad Angel と Good Angel が登場する。

Bad Ang. If thou repent, devils will tear thee in pieces.

Good Ang. Repent, and they shall never raze thy skin.

(vi. 83-84)

〈絶望感〉から抜け出すために神の下に帰りたい一心の Faustus は、この時初めて Good Angel の言葉を素直に受け入れることができる。彼は

キリストを自己の救い主として、その名を夢中で呼ぶ。

O Christ, my saviour, my saviour,

Help to save distressed Faustus'soul. (vi. 85-86)

‘Despair in God’ の状態にあって神は自分を愛していないと考えていた Faustus は今まで神やキリストの救いを求めたことは無かったのに、ここで彼が自発的にキリストの名を呼び救いを求めたこと、また上の例文の 86 行、及びその数行前で彼が口にする ‘distressed Faustus'soul’⁴ という言葉から、この時の彼の〈絶望感〉がいかに深いものであるかが窺える。

キリストの名を真剣に呼んで ‘Despair in God’ の状態を脱け出そうとした Faustus は救済への第一歩を踏み出す。ところが彼の呼びかけに応じたのはキリストではなく Lucifer であった。危機を察した Lucifer は Mephostophilis 一人では危いと見て Beelzebub と共に現われ

Christ cannot save thy soul, for he is just; (vi. 87)

と Faustus に畳み掛けるように言う。この言葉は聖書の “If we confess our sins, he is faithful and just, and will forgive our sins and cleanse us from all unrighteousness.” (I John 1:9) という言葉を Lucifer が彼の都合の良いように流用したものである。つまり神は ‘just’ であるから Faustus が罪を告白すれば罪を許し救ってくれるはずなのだが、Faustus は「魔術を手がけた自分を神は救ってはくれまい」という ‘Despair in God’ を持っている。Lucifer の成功は、一時的にこの ‘Despair in God’ を忘れキリストを呼んだ Faustus に、それを巧みな言葉で再度認識させた所にある。更に Faustus の ‘Despair in God’ に拍車をかけたのは神の沈黙である。救いを求める Faustus の前に地獄の王者である Lucifer や Beelzebub が出てきたこと、そしてその時神は何ら彼に働きかけなかったことは、彼の ‘Despair in God’ を決定的にしたのではなからうか。

以上のように天への望みを断ち切られた Faustus は、今迄のように ‘Despair in God’ から〈絶望感〉に走るのではなく、〈甘い快楽〉を徹底的に楽しもうという決断をする。この悔悟と正反対の道は彼にとって

4. 数行前では次のように使われる。

'Tis thou hast damn'd distressed Faustus'soul. (vi. 79)

〈絶望感〉から抜け出すいま一つの道であった。彼は Lucifer 登場前迄は〈甘い快楽〉を純粹に喜こべず、それはむしろ〈絶望感〉を癒すためのものであったが、この時から〈甘い快楽〉に没頭していく心構えができるのである。従って Lucifer や Beelzebub が彼に Seven Deadly Sins を見せると言った時には

That sight will be as pleasant to me as paradise was to
Adam the first day of his creation. (vi. 108-109)

と言って喜び、それを見終えた時も “O, how this sight doth delight my soul!” (vi. 170) と感嘆する。Faustus は魔術を行使していても、今迄見てきたように何度か悔悟しようとし、神と悪魔の間をさ迷っていたが、ここで Lucifer の世界に入る決断をしたのである。即ち、この Seven Deadly Sins は彼を神から離し、Lucifer の世界に導く儀式のような役割を果たしているのである。

Ⅲ

Faustus は Seven Deadly Sins の後には地獄を見たいと切望し、更に Mephostophilis に “Sweet Mephostophilis, thou pleasest me:/Whilst I am here on earth let me be cloy’d/With all things that delight the heart of man.” (viii. 58-60) と言って、8場から18場迄（正確には Old Man 登場前迄）のほぼ24年間というもの大小様々の冒険や奇蹟、また愚行を行う。この間、Lucifer によって一段と深く ‘Despair in God’ を認識させられたにもかかわらず、〈絶望感〉や〈不安〉はない。ただ24年も終りに近づいた15場で突然〈絶望感〉が生じる。

What art thou, Faustus, but a man condemn’d to die?

Thy fatal time draws to a final end;

Despair doth drive distrust into my thoughts. (xv. 21-23)

彼は眠ることでこの感情を抹殺しようとするが、突然十字架上のキリストに言及し

Christ did call the thief upon the cross;

Then rest thee, Faustus, quiet in conceit. (xv. 25-26)

と言って安堵してしまう。Faustus は本当にここで自分の罪が thief と

同程度、あるいはもっと軽いと思い、キリストの救いを信じたのであろうか。彼は24年前でさえ、5場や6場で見たとように、神は自分を救ってくれないという‘Despair in God’を感じていた。ましてこの24年近く快楽に耽溺していた彼が、ここでその罪を thief と同程度または軽いと思ったかどうかには疑問の余地がある。しかも聖書によれば、thief がキリストに救いを求めたからキリストは手を伸べたのであり、聖書に詳しい Faustus がここで自分からキリストを求めず、キリストが手を差し伸べてくれると言うのも解し難い。この Faustus の言葉は、実は Faustus が自分自身を欺き、現実の自分の姿を直視するのを逃避した言葉と取るべきではなかろうか。Faustus にとり現実直視は耐えがたい苦痛である。彼はこれから逃れるために、自分は thief のような卑しい行為はしていないのだと言い聞かせることによって‘Despair in God’を抑圧し、更には〈絶望感〉を忘れようとしたのだと言えるであろう。

こうして彼はまたもや魔術を続けていき、約束の期限が迫った18場でも Scholars の要望に応じて Helen を見せるなどしている。このとき Old Man が登場する。彼は Faustus がいまだ‘amiable soul’ (xviii. 43) を持っていることを告げ、魔術を捨て悔悟するようにと勧める。この Old Man の訓戒を聞いた Faustus は“Where art thou, Faustus? wretch, what hast thou done?” (xviii. 55) と自分が今どのような立場にいるのか、また今まで何をやってきたかを改めて自己に問う。それから彼は

Damn'd art thou, Faustus, damn'd; despair and die!

(xviii. 56)

と叫ぶ。この言葉は Faustus が24年近く〈甘い快楽〉に溺れていた間、一度も(15場においてさえも)聞かれなかった。これはかつて6場の Faustus の耳に聞こえていた言葉 (vi. 20-21) で、それを彼が今、口にするのは、彼がその時の‘Despair in God’をまざまざと思い出したからであろう。Old Man の Faustus への励ましの言葉は、結局彼を喜ばすどころか皮肉にも‘Despair in God’、そしてそれに伴って〈絶望感〉を喚起してしまった。しかも18場の‘Despair in God’と〈絶望感〉は6場のそれよりはるかに重くなっているのである。なぜなら彼は24年もの間、日々あらゆる快楽を積み重ねてきたわけで、Old Man が彼にその罪

を直視させ、悔悟させようとした時、24年の〈甘い快樂〉は余りにも重く彼の肩にのしかかり、彼を〈絶望感〉に陥らせるのである。注目すべきことはⅡ章で見たように、6場の〈絶望感〉は彼に苦しみのあまり神を求めさせたが、18場のそれは余りに深く、彼に悔悟の心を起させるどころか、自殺への願望を喚起するということである。自殺は Mephostophilis の勝利を意味するので、Old Man は急いで彼を制し、天使がいまだ彼の頭上にいること、そして神の恵みを注ごうとしていることを告げ (xviii. 60-63), “... call for mercy, and avoid despair.” (xviii. 64) と忠告する。だがこの Old Man の熱意あふれる優しい言葉も「24年も楽しんできた今となつては、とうてい神は救ってはくれまい、又、救いを頼めもしない」と思う Faustus にとっては単なる慰めでしかない。

Thy words to *comfort* my distressed soul. (xviii. 66)

(イタリックは筆者)

それでも彼は自己の罪を考えようと、自分一人にしてくれるように Old Man に頼む (xviii. 67)。だが Old Man が去り一人になった Faustus は彼の犯した罪の重さゆえに

Accursed Faustus, where is mercy now?

I do repent, and yet I do despair; (xviii. 70-71)

と言って苦悩する。この言葉には今となつては神の mercy が信じられず絶望せざるを得ない Faustus の、どうにもならないほど深い ‘Despair in God’ が滲み出ている。

だが Faustus は神は救済してはくれないと痛感しながらも、何とか他の方法で Lucifer の死の罟を逃れる手だてはないものかと苦悶する。

What shall I do to shun the snares of death? (xviii. 73)

Mephostophilis は Faustus のこのような思いを砕こうと激しく怒る。

Thou traitor, Faustus, I arrest thy soul

For disobedience to my sovereign lord:

Revolt, or I'll in piecemeal tear thy flesh. (xviii. 74-76)

この Mephostophilis の怒りは、6場で Faustus がキリストの名を呼んだ時 Lucifer や Beelzebub が彼を激しく非難したのに対して、Mephostophilis がほとんど彼を責めなかったのと対照的である。Mephostophilis がここで初めて Faustus の Lucifer への背信をなじ

り、怒りを爆発させたことは、Faustus がそのように非難されても仕方の無い程 Mephostophilis を使って〈甘い快樂〉を満喫してきたことを示すと考えるべきであろう。彼は Mephostophilis の断固とした言葉を聞くや否や、すぐさま自分の非を詫げる。

I do repent I e'er offended him.

Sweet Mephostophilis, entreat thy lord

To pardon my unjust presumption, (xviii. 77-79)

ここで77行の Faustus の言葉を吟味してみよう。repent は6行前では“I do repent, and yet I do despair.” (xviii. 71) と神に対して使ったのに、ここでは Lucifer に対して用いられており、また offended は Old Man によって “...thou hast now offended like a man.”

(xviii. 41) のように人間が神に対して罪を犯すという意味で使われているが、Faustus はここで神にでなく、Lucifer に対して罪を犯すという意味で用いている。つまり24年余りの快樂を終えようとしている今、Faustus が悔悟できるのは神にではなく Lucifer に対してであり、彼は神に対する悔悟も許されないほどの状態なのである。更に79行の unjust presumption も、1場や3場では彼は神に対して〈傲慢さ〉即ち presumption を抱いていたのであるが、24年近くも Lucifer の領域内で5 魔術を行ってきた今となつては、彼が Lucifer を離れること自体が契約違反にもなり unjust presumption と思えるのである。要するに24年を経過した18場の Faustus は Mephostophilis の怒りを正当視せざるを得なくなっているのである。

神の救いを完全に諦めた Faustus は再び Lucifer との約束を守っていかうとするが、‘snares of death’を逃れたい気持はただでさえある。彼は Old Man の説得を恐れ、Old Man に肉体的苦痛を加えるようにと Mephostophilis に頼む。更には Lucifer との契約を破らないで済むように ‘heavenly Helen’ (xviii. 93) を ‘paramour’ (xviii. 92)、即ち愛人として求める。Mephostophilis はかつて5場で Faustus から妻をほしいと懇願され、結局は悪魔を出して Faustus の望みを阻止した。がここでは愛人としての Helen を心よく出してやる (xviii. 97-98)。

Mephostophilis は妻と愛人としての Helen にどのような差異を認めた

5. P.39, II章の終りを参照のこと。

のであろうか。ここでまず Faustus の Helen への態度および Helen の Faustus への影響をみよう。

Helen の姿を見た Faustus は

Sweet Helen, make me immortal with a kiss. (xviii. 101)

と言って、余命いくばくもない自分と、その美によって immortal である Helen との同化を計ろうとする。Helen からの kiss を受け彼女との自己同化を果たした Faustus は、今度は Helen の唇に天国がある (“... heaven is in these lips.” xviii 104) と思うことで、彼の手にはもはや届かなくなった天国への願望を成就する。この時 Old Man が再登場し沈黙のうちに成行を眺める。が、Faustus は自分を Helen の愛人 Paris に見たて、Old Man も Faustus の救いを断念する (xviii. 119-121) 程に彼女の美を絶賛し、この彼女が自分の愛人だ (xviii. 106-107) と思ひ込むことで恍惚としている。

以上の様に、Helen は Faustus の心を陶酔させ、彼が深い ‘Despair in God’ を意識しているにもかかわらず、彼の〈絶望感〉を忘れさせ、代りに〈甘い快樂〉を与えている。こうして Helen に夢中になって悔悟の気持すら無い Faustus に、天国への門は閉ざされる (xviii. 119-121)。W.W. Greg は Mephostophilis の出した Helen は spirit、即ち（この劇では）devil で、Faustus は Helen を抱くことで悪魔と bodily intercourse をしたのだと述べている⁶。Helen を悪魔と考えないまでも確かに彼女は Faustus に一時的快樂を与えることで、彼から天国の祝福を奪い、悪に一役買っている。要するに愛人として Mephostophilis に呼び出された Helen は、その比類ない美で彼を誘惑している。この誘惑という要素は愛人にはあっても妻にはないものである。Mephostophilis が妻を拒否したのに愛人として Helen を出すのを快諾したのは、このことを彼が計算した上だったのではなからうか。

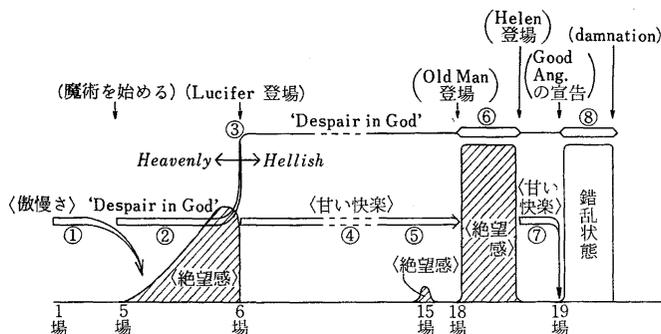
Helen という一時的快樂も無くなった 19 場の Faustus には、今や “...heavens conspir’d his overthrow.” (prol.22) の如く、Good Angel による天の宣告が待ち受けているだけである。こうして Faustus は死の恐怖で狂乱状態 ‘desperate lunacy’ (xix. 11) になりながら、ついに

6. W.W. Greg “The Damnation of Faustus,” *Marlowe*, ed. Clifford Leech (Prentice-Hall, Inc., 1964), pp.105-106

damnation に至るのである。

結 論

Faustus の damnation に至る過程を簡単に図式化すると次のようになる。



大線 () はその時点で Faustus の心の中心的位置を占めるものとする。

- ① <傲慢さ>は Faustus に魔術を行わせる動機として重要である。
- ② 'Despair in God' は5場から意識される。それは6場で<絶望感>を生み Faustus に悔悟の決心をさせる。
- ③ Lucifer の登場により神への望みは断たれ、Faustus は今や神を完全に諦め、'Despair in God' は非常に深くなる。
- ④ 以後24年足らずの間<甘い快樂>に没頭し、'Despair in God' は非常に深いままだが、<絶望感>はない。
- ⑤ 24年も終りに近い15場で、<絶望感>が意識されるが彼はそれを抑えてしまい再び<甘い快樂>にふける。
- ⑥ Old Man が登場し Faustus に悔悟をすすめた時、再び 'Despair in God' が心の中心を占め、それに伴って深い<絶望感>が起る。この<絶望感>は②に比べて余りにも深く、Faustus を悔悟に向わせるどころか徹底的に救いを諦めさせる。
- ⑦ ここで Faustus は Helen を求めるが、これは③の Lucifer の登場、'Despair in God' の再認識、そして24年間の<甘い快樂>という一連の状況と似ている。この二つの場面に共通することは、厭でも認めざるを得ない 'Despair in God' を逃れるために、彼が永遠の魂のことを考えずに、刹那的な<甘い快樂>に耽溺したことである。こうして24年前と同じ誤ち、否、Helen の登場で Faustus に救いの可能性が無くなったことを思うと、それ以上の大きな誤ちを犯す。
- ⑧ Good Angel から永遠の死の宣告を受け、狂乱状態のうちに、ついに damnation に至る。

Doctor Faustus 試論—Faustus の ‘Despair in God’ と〈絶望感〉—

Faustus が damnation を招いたのは、彼が魂を売って魔術を行使し、24年間〈甘い快楽〉に耽溺したという外的要因のためではなく、むしろ内的要因のためである。即ち、彼の「魂を売ってまで魔術を手がけた自分を神はもはや愛していない、救ってもくれまい」という ‘Despair in God’ が、彼に神の永遠の愛と救いを信じなくさせ、〈絶望感〉を喚起させ、ついには damnation に至らしめたのだと言えよう。

註 テキストは C. Marlowe, *Doctor Faustus*, ed. John D. Jump (London, 1972) を使用した。